1920 年代日本におけるアナーキズム思想史の再検討
— クロポトキンの受容と解釈を中心として —

Reconsideration of the History of Anarchism in Japan in the 1920's
– Focusing on the Acceptance and Interpretation of P. Kropotkin –

蔭木達也
KAGEKI, Tatsuya

1920 年代の日本では、大正デモクラシーと呼ばれる機運の中で、労働者や小作人などが自分たちに対する不当な扱いの改善を求め、資本家や地主の抑圧に対抗するための様々な運動が行われた。アナーキズムや同時代の社会主義は、そのような闘争の現場での緊張感の中で生まれてきたものである。他方で、従来のアナーキズム史論は、大杉栄と山川均の間に交わされたアナ・ボル論争を象徴的な到達点としながら、大杉の死から戦中にかけての社会運動との関わりの中での思想的展開については更なる分析の余地を残している (1)。小松隆二の研究は大杉以後の労働運動に携わったアナーキストに脚光を当てているが (2)、農村に注目したアナーキストたちがその裾野をどこまで広げたのかについては十分に論じていない。ジョン・クランプは、サンディカリスムに対して農村の論理を立てて純正アナキズムを主張した八太舟三の思想を論じており (3)、農村とアナーキズムを結びつけた論者を軸に当時の思想を論じるものとしてはほとんど唯一の研究となっている。しかし、それまで労働運動を中心に携わっていたアナーキストの中からなぜ八太のような農村に関心を持つ思想家が出たのかということについて、思想史的には明らかにできていない。

そもそも、アナーキズムの定義は一様ではなく、その内容も論者によってまちまちである。英語圏の研究では、ロシアなど日本以外のアナーキズム思想史によって日本のアナーキズムを規定するものがあるが、それらの研究では日本の思想がロシアやフランス、アメリカの思想史的文脈に沿って位置付けられており、内在的な思想的展開

については十分に明らかにされていないといえる[4]。そこで本論では、1920 年以降の日本におけるピョートル・クロポトキンの受容と解釈という文脈に絞って思想的展開を辿ることで、いわゆるアナーキズムに関わった人々の間で、どのように論理の展開、運動の戦線の拡大、そして新たな思想の創出が行われたのかということを明らかにしたい。

1.『労働運動』から『小作人』へ　アナーキストと農民運動の関わり

1920 年初頭の日本において、未だクロポトキン論は盛り上がっていなかったものの、大杉栄などが翻訳と労働運動におけるその理論的援用を進めた結果、『麵麭の略取』や『相互扶助論』、『青年に訴ふ』などクロポトキンの訳書は増加し、アナーキストたちが基本的文献としてそれを読む環境は整っていたといえる。他方で、アナーキズムと農民運動への関わりがどう始まり、どう推移したのか、その経緯はあまり知られていない。先に挙げたクランプの研究は、『労働運動』における農民運動論や雑誌『小作人』を参照していないために、章立てから 1923-26 年の考察が抜け落ち、八太の「純正アナキズム」の背景にあるものを抽象的な日本の農村像に還元してしまっており、また 1910 年代にすでにクロポトキンを日本の農民生活に重ね合わせて読むことが一般的であったかのような誤解をしている。

1920 年以降、小作争議の高まりなどを受けて農村への関心が高まっていた[5]。小作争議はしばしば一ヶ月以上の長期にわたり、農村という地域社会全体を巻き込んだ改革に結びついていった[6]。その運動に呼応して、1922 年には賀川豊彦らが日本農民組合を結成[7]。1925 年には農業協同組合の前身である産業組合から『家の光』が創刊されるなど[8]、農村を取り巻く運動や言論も増加した。このような時代状況を背景に、1920 年以降のアナーキストにおける農村の関わりには二つの流れが生まれた。その一つは、大杉とともに活動していた雑誌『労働運動』同人の中からの動きである。

大杉が 1920 年以降虐殺の時まで執筆活動の舞台としていた雑誌が、『労働運動』である[9]。この雑誌は大杉が「革命直接行動の啓蒙宣伝を狙ったもの」で「アナキスト同志の血の通った合作」[10] と望月桂が振り返っているように、この時期のアナーキズム運動とそれに関わるアナーキストたちを代表する雑誌であった。アナーキストにおいてクロポトキンと農村が結びつく契機の一つは、岩佐作太郎が第二次『労働運動』に農民問題に関する欄を設けたことにある（表 1）。岩佐は千葉県の豪農の三男として

生まれ、13 年間の在米生活を通じて社会主義運動に携わり、1914 年に帰国。19 年に上京し、第二次『労働運動』から同人となった。岩佐は「農民運動」欄を使って富山、岐阜、埼玉など国内各地の農民運動を取り上げ、小作人の連帯と運動を呼びかけた。また、近藤栄蔵（筆名伊井敬）や和田久太郎、近藤憲二などの同人もこの欄に寄稿し、賀川豊彦が設立した日本農民組合への批判や、小作組合の増加を論じている。泉正重（筆名伊豆味正重）の沖縄に関する報告も興味深い。

表 1:『労働運動』における農民運動の記事 (12)

次	号	年月日	執筆者	「記事名」（掲載面）
第 1 次	農民運動に関する寄稿なし			
第 2 次	1 号	1921.1.29	岩佐作太郎	「農民問題」（7）
	2 号	1921.2.1		「農民問題」（5）
			(判読不能)	「自分で解決」
			時事新報	「掟米を下げろ」
			大阪毎日	「豊作だとて」
			神戸の兼谷	「地主へ押寄す」
			小川豊明	「難解な智識」
	3 号	1921.2.10	近藤栄蔵	「農民問題」（5）
	4 号	1921.2.20	中島安太郎	「富山県下農民の蜂起」（5）
	5 号	1921.3.7	岩佐作太郎	「農民問題」（5）
	7 号	1921.3.20	岩佐作太郎	「農民問題」（5）
	9 号	1921.4.24	岩佐作太郎	「農民問題」（5）
	11 号	1921.5.13	岩佐作太郎	「小作人問題」（5）
第 3 次	1 号	1921.12.26	和田久太郎	「鐘が鳴る—農村争議雑感—」（6）
			いも作 (11)	「農村争議　埼玉県下の火の手」（7）
	2 号	1922.2.1	和田久太郎	「行為の伝道—農村問題雑感—」（6）
			いも作 (11)	「反抗の精神—埼玉県の形勢」（7）
	3 号	1922.3.15	近藤憲二	「真個の陣容—農村問題批評—」（6）
			一小作人	「屈従から糞度胸へ」（7）

	4 号	1922.4.15	近藤憲二	「謹んで再び—仁科雄一君へ—」(6)
				「農村から」(7)
			福田庄太郎	「農村と土地—協調主義の手品—」
			藤井生	「地主の愚痴」
			牧野仙太郎	「『名誉』の代償」
	5 号	1922.6.1	和田久太郎	「何んの代表—農村問題雑感—」(6)
			しろた生	「沖縄から」(6)
	6 号	1922.8.1	泉正重	「琉球農村と製糖会社」(6)
			山下生	「永久的の減納運動」(7)
			泉正重	「最後まで」(7)
	7 号	1922.9.10		「農村運動同盟」(11)
				「月刊『小作人』発行」(11)
	11 号	1923.2.10	中名生幸力	「藤田農場の小作争議」(11)
	12 号	1923.3.10	T 生	「日本農民組合第二回大会 —神戸青年会館に於て—」(5)
第 4 次	12 号	1925.9.1	岩佐作太郎	「田園雁信」(7)
	15 号	1926.4.1	P 生	「広東共産党治下の労働者農民」(6)
			奥谷松治	「新農民運動の目標」(8)
第 5 次	4 号	1927.4	麻生茂	「農村運動の本質」(20-23 頁)
	7 号	1927.7	麻生茂	「農村は急迫している」(30-37 頁)

ただし、これらの論はあくまで実際の運動に対する批評であり、クロポトキンや国内外の文献を参照して論じているものはない。農村の運動は自生的であり、当初、『労働運動』同人のアナーキストたちは農民運動に関わっていなかった。そのため、労働組合運動に対してはその旗手となり、運動を牽引し理論を示そうとした『労働運動』であったが、小作組合や農村の運動に対しては、むしろ各地域で様々に生起している運動を後追いで報じる形となっている。「農民問題」の欄を設けた当初、『労働運動』同人は農村に対して示すことのできる運動理論や文献を有していなかったのである。

『労働運動』同人が農村での運動への関わりを深めたのは、1922 年 9 月に広告されている『小作人』の発刊の前後である。この時の『小作人』発行は、第 2 次である。第 1 次『小作人』は 1 号しか発行されなかったが、その創刊はアナーキストと農民運動

とが結びついたきっかけであった[13]。

農民運動と『労働運動』同人を結びつけたのは、長島新であった。長島については森田和志による研究があるので、それに基づいて『労働運動』同人と小作運動が結びついた経緯を概観する[14]。長島は建設者同盟への所属や日本社会主義同盟創立大会への参加および検挙といった経験を経て、1921 年 2 月、地元埼玉県で小作争議を主導して小作人組合を結成する。そして、同年 5 月には熊谷寺裏の畑で講演会を開催し、石川三四郎、岩田作太郎、高津正道、和田久太郎らを演者に迎えた。8 月にも講演会を開催し、暁民会から杉英郎、労働社から茂野藤吉と後藤謙太郎、他に栗村四郎、中名生幸力、岩佐作太郎が来場。この参加者が第 3 次『労働運動』第 1 号に「農村争議　埼玉県下の火の手」を書き、埼玉における小作争議を紹介する。長島はさらに活動を拡大するため、中名生に応援者の派遣を要請した。中名生は早稲田大学の民人同盟会、明治大学のオーロラ協会、暁民会に深く関係し、同年 5 月に五月会という団体を立ち上げており、アナーキストらの人脈を多く有していたのである。中名生の声がけにより、渡邊善寿、塚本恒次郎、古田大次郎が同人となって、長島とともに小作人社を設立することとなった。小松隆二によれば、中名生も実質的な同人であったという[15]。小作人社は翌 1922 年 2 月 6 日に『小作人』創刊号を発行した。ここには望月桂の挿絵も載り、アナーキストによる農民運動の機関誌としては初めて創刊された雑誌となったが、編集人であった古田は「アナもボルもお構いなし」の方針で編集にあたったという。しかしながら、警察の厳しい干渉や、同人の間の対立により、小作人社は次号を出すことなく活動が停滞してしまう。

そこで、小作人社を解散して再編成する形で生まれたのが、農村運動同盟であった[16]。第 3 次『労働運動』第 7 号に告知されているのがこれである。農村運動同盟は 1922 年 10 月 25 日に第 2 次『小作人』の創刊号を発行した。そこには東京の同人として、加藤高寿、後藤謙太郎、渡邊善寿、岩佐作太郎、佐藤護郎、中名生幸力、宮越信一郎の名前が挙げられている[17]。のちに中名生が同盟から外され、望月桂が発行人となった。その後震災の痛手などもあり、1926 年からは発行人を木下茂とした第 3 次『小作人』が始まる。この際、岩佐・望月以外の同人は大きく変わり、近藤憲二、山鹿泰次、武良二、渡邊精一、青井潔、副島辰巳、古川時雄、木下茂が名を連ねている[18]。

第 1 次から第 3 次まで、期間としては 1922 年より 28 年まで途切れながらも続けられた雑誌『小作人』は、日本で初めてアナーキズムと農民運動を結びつける思想の

舞台となった雑誌である。クロポトキンを農村に結びつける読解も、この雑誌において初めて生まれてきた。例えば、第 7 号に掲載されたクロポトキン「近代農業の傾向(一)」[19] は、底本は不明だが、内容は『田園・工場・仕事場』の農業論と同様のものであり、クロポトキンの農業論に焦点を絞った紹介としては初めて雑誌に載ったものと考えられる。

『小作人』同人にクロポトキンが注目された背景には、労働運動の中にはなかった都会と農村との対立関係の問題がある。それを如実に示しているのは、第 3 次『小作人』3 巻 2 号の久保による「解放運動上に於ける農村の地位」という 1924 年の論考である。久保はクロポトキンの『相互扶助論』を参照しながら、ボルシェヴィズムもサンディカリスムも農村問題を解決しないとし、「農工両全の自由コムミュンの建設」を主張する [20]。その理由は、「農村が都会に隷属」し、「農民が、都会労働者に隷属」しているという問題意識にあった。労働運動によって経済組織が変革されても、「都会が存続する以上、農民と都会労働者とは、互いに敵ならざるを得ない」。ここに、労働運動と農民運動の間の矛盾が生じる。しかし、クロポトキンの主張する村落共同体としての「自由コムミュン」であれば、労働者と農民との間の矛盾を解決できると考えられたのである。ここにこそ、自身の著作活動の最初期において『労働運動』と『小作人』に多く寄稿した八太舟三が、クロポトキンを重視した「純正アナキズム」の主張を行う理由があったのである。

2. 八太舟三の「純正アナキズム」とクロポトキン理解

八太が初めてクロポトキンに言及するのは 1926 年の第 4 次『労働運動』第 15 号に寄稿した「労農国家と農工自由市」である [21]。「農工」はクロポトキンの『田園・工場・仕事場』の副題でもある “Industry Combined with Agriculture”、「自由市」は『相互扶助論』で参照される中世の自由都市 “free city” から着想を得たものだ。八太はクロポトキンが中世都市を論じる部分でしばしば登場する「コミューン」(“Commune”) という概念も「農工自由市」と類似の意味で使っている。八太が言う「自由コムミュン」は、中世の誓約団体を母体とする都市国家を像としており、その運営を構成員が自由に決定するという意味が込められている。八太が農村とクロポトキンを結びつけて独自のアナーキズム論を展開するのは、『小作人』第 3 次 10 月号から連載され、のちに『農村社会問題講座』というパンフレットにまとめられる「農民講座」である。八太

はこの中で、「都会の工場労働者と小作人とは利害が相反する」「マルクスの理想は資本主義の延長」としてサンディカリスムやボルシェヴィズムを批判した上で、クロポトキンの “esprit d’organisation spontan é e que le peuple”(22) という概念に注目する。これを八太は「民衆の内在的組織力」「創造的組織力」と訳し、農村が共同して作業を行うことで繁栄を目指そうとする「村を作る力」を示しているとする。『相互扶助論』などで触れられている “the village community”（共産村）のように「農耕と村落を営む」ことが「人間の本性」であると説き、「相互扶助の社会を造り、農村を組織して農耕をなす」ことが自然であるという (23)。八太の思想についてはクランプの研究に詳しいのでここでは詳述しないが、クロポトキンから導き出されたアナーキズム論は、次のようなものであった。すなわち、アダム・スミスからマルクスに至るまでの経済学者に前提とされていた効率的な「生産」のための中央集権制（「集産制」と略称）に対抗して、クロポトキンが強調する「消費」を基本とした「地方分散的共産制度」（八太はこれを「地方分散制」「分散制」ともいう）を採用すべきである。「アナルキズムでは絶対に生産を基本としない」(24)。この制度は最小限度で自給自足するコミューンを単位とし、必要に応じて生活必需品の生産や文化的生産を行う (25)。そして、その根底を貫く原理が「自由連合主義」である (26)。八太はこのように、「消費基本」の「自由コムミュン」が「地方分散制」で各地に存在し、それらの「自由連合」によって成立する社会を「純正アナキズム」の理想としたのである。そのために、のちに触れる鑓田の主張のような、農業生産を重視した階級闘争論としての重農主義は批判の対象となる (27)。

このような日本の農村に対するアナーキズムの適用、そしてクロポトキンの思想を農村に重ねて読解するという八太の思想が、小作争議など農民運動の現場に足を運んだ 1921 年以後のアナーキストの、労働者を組織するサンディカリスムだけでは日本の大部分に広がる農村における社会変革を実現できないという反省の上に登場したものであったことが重要である。そのことこそ、八太がボルシェヴィズムもサンディカリスムも同様に批判の対象としなければならなかった、根本的な理由をなしていたのであった。

3. 新しいアナーキズムの立ち上がり　『農民』における「自治」

八太による日本の農村と結びつけられた「農工合体」のクロポトキン論は、長島の導きで大杉の主宰する『労働運動』同人であった岩佐や中名生らが農民運動と関わっ

た 1921 年、そして 28 年にかけて『小作人』という舞台でアナーキズムと農民運動とが交わる思想が形作られたことを背景に生まれてきた。

同時期に、クロポトキンと農村を結びつける議論が生起されるもう一つの流れがあった。それは、雑誌『農民』を舞台とする思想の系譜である。

『農民』は 1927 年に創刊され、「農民文芸の研究、制作、普及を目的」(28) とした。創刊に至る遠因は 1922 年のシャルル・ルイ・フィリップ十三周忌記念講演会であり、その後から定期的に開催された農民文学研究会（のち農民文芸会と改称）の活動が、『農民』の創刊へとつながった。この雑誌は、高橋春雄が解説するように、同時代の農民文芸の盛り上がりを背景に創刊されたものであり (29)、その根底には 1920 年代の慢性不況と農村の経済的苦境があった。そのため、雑誌には小説や詩に限らず、農村経済論や組合運動論も多く投稿された。創刊号では、東洋経済編集長を務めた高橋亀吉、プロレタリア作家中西伊之助、のちに精神分析の大家となる大槻憲二、英文学者帆足圖南次、そして石川三四郎と鑓田研一、第二号以降でも民俗学者今和次郎などが寄稿し、様々な思想や背景を持った論者が、それぞれの角度から農村問題を論じている。その意味で『農民』はある特定の主義に肩入れすることなく、農村問題という切り口で幅広い論者を迎えて始まった雑誌であった (30)。この中で、農村論にクロポトキンを持ち出したのは、鑓田研一であった。大阪でトルストイ研究に取り組んでいた鑓田は、トルストイの思想に「無政府重農主義」を見出す (31)。『農民』創刊号で鑓田は、パウル・エルツバッヘルの整理を参照しつつ (32)、トルストイとクロポトキンは、超個人主義である点、道徳的に相互扶助主義である点、経済的に社会主義を支持する点において共通し、トルストイズムはアナーキズムと全く一致するという。トルストイの描く理想社会は革命以前のロシアのミールを参照しているとし、「無政府重農主義」の観点からトルストイの芸術論を見直さなければならないと締めくくる (33)。

鑓田は『農民』に連載する中で、自らを重農主義者でありゆえにアナーキストであると位置付けた上で (34)、ルチャルスキーやトロツキーを筆頭に殆ど全てのマルクス主義者が都会のプロレタリアートだけを重視して農民階級の存在を無視しているとして批判し、反マルクス主義の立場に立つ (35)。八太と鑓田の相違は、八太がクロポトキンの『相互扶助論』などに登場する「農工」合体の「共産村」を参照したのに対し、鑓田はクロポトキンを意識しながらも、ロシアのミールを念頭に置いたトルストイの「農村」を重視したことにある。

また、鑓田の理論形成に大きな影響を与えたもう一つの雑誌がある。それは『農民自治』である[36]。創刊時の第 1 次『農民』があくまで文芸誌の立場から始まったのに対し、『農民自治』は、その立場を大きく異にしていた。この雑誌は、埼玉の農家の長男であった渋谷定輔が中西伊之助に農民運動の組織化を相談し、ちょうど日本版「非政党同盟」の立ち上げを準備していた下中弥三郎や[37]、石川三四郎も加わって 1925 年に発行母体となる農民自治会を設立し、1926 年に創刊された雑誌である[38]。その目的は農民運動そのものの立ち上げと支援、そして「非政党同盟」という運動の呼びかけであった。

鑓田は、『農民自治』に関わることで、運動における農民と工場労働者との関係を論じることとなった。そこで鑓田は「農民自治」を自らの「無政府重農主義」の内部に位置付け、それが労働者や都市における運動に先立って始められなければいけないとする論理を創出した[39]。このことは、鑓田が単にトルストイアンにとどまらず、クロポトキンを参照しながら無政府重農主義の理論を精緻化することに繋がる。その中で鑓田は、クロポトキンが社会の組織化について「自由な団体の自由な連合によって、単純性から複雑性へ」と進むことを指摘していることを踏まえ[40]、「農業コンミュンとその連合」によって新しい社会を創造する「自由連合主義」を主張するようになる[41]。八太と鑓田は両者ともクロポトキンの著作を参照し、同じ「自由連合主義」を主張しながら、八太があくまでクロポトキンの「消費」の論理にこだわり、かつ労働者と農民とが共存する「農工」合体の「自由コンミュン」を目指したのに対し、鑓田は最後まで農業生産に主眼を置いた「農業コンミュン」の同時多発的な独立と連合によって新しい社会を創出することを望み、その対立は解決されることがなかった。

『農民自治』の運動を下敷きにして、鑓田の「無政府重農主義」と「自由連合主義」をトルストイやクロポトキンから切り離して、日本の現状に適合的な技術論に落とし込んだものが、犬田卯の「農民自治主義」であった。犬田が描く「農民自治主義」の社会は次のようなものである。「先ず歴史的、地理的条件によってもっとも緊密に結びつき、相互扶助的な条件をより多くもっている村なり、部落なりが、一個の自治連合体の単位となる。それがお互いに平面的に一つ一つ結びついていって、郡連合、県連合、国連合、世界連合（中略）こうした自由連合体が世界連合体として全地上を覆う」[42]。ここには八太あるいは鑓田の自由連合主義と同様のものが現れているように思える。しかし犬田はその後、自らが編集者となって 1933 年まで発行を継続した『農民』誌上

で、住居や必要な施設、そこでの生活のあり方など具体的な社会構想を展開する。その上で、「クロポトキンの農業進化の僻論の如く、主観的な、我田引水的な、現実歪曲に堕し、如何に現実の動き現実の感情を尊ぼうとしても、それが不可能である」として、アナーキズムに立脚しながらクロポトキンとの決別を宣言し、「農民自治主義はアナルシーの社会を実現する現実的な唯一の方法である」と主張する (43)。犬田の「農業自治主義」は、クロポトキン解釈から生まれた理論を統合して日本の実情に合わせた構想へと作り変えることで、クロポトキンを離れた新しい思想を生み出すことになったのである (44)。

まとめ

ここで、本論で辿ってきた思想史を概括したい。1921 年以降アナーキストが農民運動との関わりを深める中で、労働運動を越えて農村にも通用するアナーキズム論が必要とされた。1926 年になると、八太が農業と工業が合体した共産村落の像をクロポトキンの論から導き、純正アナーキズムとして自由コミューンの連合社会を主張した。また、1925 年以降渋谷が牽引した「農民自治」の運動や下中の「非政党同盟」の理論を背景に、トルストイアンの鑓田はクロポトキンを参照しつつ「無政府重農主義」を主張する。その主張は 1930 年以降犬田にも引き継がれ、「農民自治主義」へと結実する。

このように本論では、アナーキストにおけるクロポトキン受容の展開を追うことで、今ではあまり論じられることのない雑誌や人々を改めてアナーキズム史の中に連続的に位置づけることができ、またその人々が関わった実際の社会運動との関わりを明らかにすることで、その理論の裾野の広さや解釈の振れ幅を示すことができた。

ここから明らかになったのは、一つには、ある一人の人の思想が、いかに多様に、柔軟に解釈され、展開されるかということである。アナーキストたちはクロポトキンをしばしば参照してきたが、そこから引き出されるものは一様ではなかった。当然このことは、マルクスを始め他の思想家を受容する際にも当然起こりうることである。特にクロポトキンの場合、読み手が何語で読んだか（英語、フランス語、日本語訳）、どの著作を読んだかによって、その解釈と用いる単語が大きく変わることとなった。例えばコミューンという単語に注目が集まったのは明らかに 1920 年以降であり、それは『田園・工場・仕事場』が和訳され読む人が増えたためだろう。逆に 1924 年以降、クロポトキンからサンディカリスムを読み込む論者が非常に少なくなるが、これは大杉

のようなフランス語文献を参照する読者が減り、CGT などとの関連で読まれなくなったからだと考えられる。

もう一つのポイントとして、その受容の思想史を追っていくと、単にバラバラな解釈が増えていくのではなく、その解釈同士の融合や対立、類推によって、新しい概念や発想が生まれてくることがわかる。単語が同じでもその定義が異なっていたり、熟語の片方が他のものと入れ替わったりすることで、議論の中身が次々にすり替わっていく。思想史を追う上で、表された概念の内実が固定化されていないことを前提にしながら各人の思想を掘り下げて行くことで、従来は看過されていた、論者が持つ思想の独自性や固有の論理を引き出すことができるだろう。

鑓田や犬田などの個別の論者の思想については、まだ十分に論じた研究が少ない。また『大地に立つ』など、ここでは触れられなかったが、国会図書館などにも収蔵されることなく戦後忘却された雑誌や文献も少なくない。また、現実の小作争議などとの関わりについても、十分に論じることができなかった。1920 年代から 30 年代にかけての思想史を、面的に、そして立体的に論じるために研究すべきことは山積しており、今後の課題としたい。

最後に、『小作人』関連資料を保管している埼玉県立中央図書館および『農民自治』関連資料を保管している富士見市立中央図書館に史料閲覧の便を図っていただいた。ここに明記して感謝する。

注

(1) 例えば、松田（1963：49-50）や大窪（2010）。
(2) 小松（1988）など。
(3) John Crump（1993）。
(4) 例えば、Germaine A. Hoston（1994）、Steven G. Marks（2003）、Sho Konishi（2013）。
(5) 庄司（1991：232-269）。
(6) 西田（1991：265-301）。小作争議がこのような性格を持ったのは、その指導者が新たな村落支配秩序を目指した篤農的農民であったことが背景にあると林は指摘する（林宥一・安田浩（1985：196-7））。本論が示すような 20 年代後半の農村における「自治」の思想の生長は、従来の農民運動研究が明らかにしてきた、20 年代において経営発展を成した小作・自小作農民の経営発展と深い関わりがあるが、この関係の解明については今後の課題としたい。
(7) 隅谷（1995）。
(8) 創刊の経緯については河内（2011：27-39）。

(9) 雑誌『労働運動』についてのまとまった研究は、大沢正道「「労働運動」小史」（1973）『大杉栄主幹　無政府主義新聞　労働運動　第一次～第四次完全復刻版』471-472 頁を参照のこと。
(10) 望月桂「『労働運動』について」（1973）『大杉栄主幹　無政府主義新聞　労働運動　第一次～第四次完全復刻版』巻頭。
(11) 後述の森田論文ではこれを岩佐執筆としているが根拠がない。1921 年の 6 月に産まれた中名生幸力の息子は和田久太郎に「芋作」と命名されており、中名生の筆名である可能性も否定できない。
(12) 第 1 次～第 4 次までは前掲復刻版を、第 5 次は黒色戦線社、1981 年による複製版を参照。
(13) 雑誌『小作人』については、1989 年に黒色戦線社からの復刻版があり、国会図書館にも収蔵されているが、これには 4 号分の欠号があった。うち 3 号分についてはのちに見つかり、埼玉県立図書館に所蔵されている復刻版『小作人』には、後ろ見返しに封筒を貼り付けてその複写を収納してある。唯一未発見であった第 3 次 8 号、1927 年 9 月 1 日は、アナキズム文献センターの調査により 2011 年にアナキストクラブの保管資料から発見された。山田崇正「黒色戦線社発行「小作人」復刻版　欠号分見つかる」アナキズム文献センター、http://cira-japana.net/pr/?p=4、2018 年 6 月 8 日閲覧。
(14) 森田（1997：69-83）
(15) 小松（1987：62）
(16) 渡邊善寿「埼玉小作人社の解散」『小作人』第 2 次 1 号、1922 年 10 月 25 日。参照は（1989）『小作人　復刻版』黒色戦線社による。以下同様。
(17)「農村運動同盟」『小作人』第 2 次 1 号、1922 年 10 月、1 面。
(18)「同人」『小作人』第 3 次 1 号、1916 年 10 月、4 面。
(19) クロポトキン「近代農業の傾向（一）」『小作人』第 2 次 7 号、1923 年 9 月、4 面。
(20) 久保「解放運動上に於ける農村の地位」『小作人』第 3 次（第 3 巻）2 号、1924 年 2 月、2-3 頁。署名は姓のみだが、おそらく久保譲であろう。久保譲は明治大学へ入学し、オーロラ協会、のち五月会へ入会し、岩佐や中名生と交流があり、『労働運動』同人とも面識があった（日本アナキズム運動人名事典編集委員会（2004：225））。
(21) 八太舟三「労農国家と農工自由市」『労働運動』第 4 次 15 号、1926 年 4 月。
(22) Pierre Kropotkine, *La Conqu ê te du Pain*, Paris: Tresse et Stock, 1892, Chapter 5, Section 3.
(23) 八太舟三「農村社会問題講座」（初出：全国労農組合自由連合会、1928 年）『八太舟三全集　無政府共産主義』黒色戦線社、1981 年、233-298 頁。
(24) 八太舟三「社会問題講座（二）」（初出：『黒旗』1930 年 10 月）同書、76 頁。
(25) 八太舟三「われらの経済学を樹立せよ」（初出：『自由連合新聞』37, 38, 40, 41, 42,45 号、1929 年 7 月～1930 年 3 月）同書、115-32 頁。
(26) 八太舟三「自由連合主義について」（初出：『生活思想』創刊号、1930 年 6 月）同書、1981 年、1-2 頁。
(27) 八太舟三「重農主義に反対す」初出不明、同書、184-8 頁。

(28)「農民文芸会規約」『農民』第 1 次 1 巻 1 号、1927 年 10 月、77 頁。引用にあたっては、（1990）『復刻版　農民』を参照した。以下同様。
(29) 高橋春雄「解説」『農民　解説・総目次・索引』（1990）『復刻版　農民』別冊。
(30) このような雑誌の方向性は、創刊の辞で「大同団結」を掲げた発行人の加藤武雄の意向が反映されたものであった（加藤武雄「創刊の辞」『農民』第 1 次 1 巻 1 号、1927 年 10 月、1 頁）。しかし創刊当初から、マルクス主義化するプロレタリア文学を批判した編集者犬田卯の立場や、鑓田研一のマルクス主義批判は、加藤の意図に反して他の運動との連携の機会を遠ざけていた。加藤が外れた第 2 次『農民』創刊号の編集後記には竹内愛国が「農民文芸」は「プロレタリア文芸」の先を行くのだと主張し、「大同団結」を明確に否定する形となった（竹内愛国「編輯後記」『農民』第 2 次 1 巻 1 号、1928 年 8 月、48 頁）。
(31) 鑓田のトルストイ論については、鑓田研一（1927）。鑓田の思想についてはまだ研究が進んでいないが、日本近代文学館の鑓田研一文庫に関連文献が収められており、今後取り組んでいく予定である。
(32) エルツバツヘル（1921）『無政府主義論』。原著は Paul Eltzbacher, *Der Anarchismus*, Berlin: J. Guttentag, Verlagsbuchhandlung, 1900。また、1908 年に英訳が出ている。
(33) 鑓田研一「トルストイの重農主義」『農民』第 1 次 1 巻 1 号、1927 年 10 月、34-40 頁。
(34)「重農主義者として、従ってアナーキストとして」という表現に現れているように、鑓田の中では無政府主義と重農主義とが共通するものとみなされている。「階級理論としての重農主義（3）」『農民』第 1 次 2 巻 4 号、1928 年 4 月、18 頁。
(35) 鑓田研一「マルクス主義に於ける農業問題の展望及び批判」全 2 回『農民』第 1 次 1 巻 2-3 号、1927 年 11-12 月及び「階級理論としての重農主義」全 5 回『農民』第 1 次 2 巻 2-6 号、1928 年 2-6 月。
(36)『農民』とは異なり、『農民自治』の創刊号から 18 号までは復刻されていない。渋谷定輔の生地である埼玉県富士見市の富士見市立中央図書館に、渋谷が所蔵していた『農民自治』原本や関連文書一式が保管されている。
(37) 下中弥三郎（1925）。
(38) 詳しい創刊の経緯については、渋谷（1970）を参照のこと。
(39) 鑓田研一「農民自治の理論と実践」『農民自治』16, 17 号、1928 年 4, 6 月。
(40) ここで鑓田は出典を明記していないが、クロポトキンによるこのような記述は複数挙げられる。例えばブリタニカ百科事典にクロポトキンが執筆した「アナーキズム」項目中には次のような記述がある。“True progress lies in the direction of decentralization, both territorial and functional, in the development of the spirit of local and personal initiative, and of free federation from the simple to the compound, in lieu of the present hierarchy from the centre to the periphery.” *Encyclop æ dia Britannica*, Eleventh Edition, Cambridge: Cambridge University Press, 1911, pp.914-19.
(41) 鑓田研一「組織・その原理と形態」『農民』第 4 次 1 巻 1 号、1931 年 10 月。
(42) 犬田卯「農民自治の話（二）」『農民』第 3 次 2 巻 10 号、1930 年 10 月、29 頁。

(43) 農民作家同盟（犬田卯）「空想的・遺物的アナキズムより建設的・現実的農民自治主義へ」『農民』第 5 次第 1 巻第 9 号、1932 年 12 月、1-5 頁。
(44) 犬田の「農民自治主義」の詳細については、舩戸（2004：31-42）および平島（2007：227-240）を参照のこと。岩崎（1997：135-137）にも言及がある。

参考文献

岩崎正弥（1997）『農本思想の社会史——生活と国体の交錯』京都大学出版会
エルツバツヘル（1921）『無政府主義論』若山健二訳、新人会叢書第 4 編、聚英閣（原著 1900 年刊）
大窪一志（2010）『アナキズムの再生』にんげん出版
河内聡子（2011）「制度とメディア——雑誌『家の光』創刊の経緯に見る」『日本文芸論叢』20 巻、東北大学文学部国文学研究室、pp. 27-39
小松隆二（1987）「ある忘れられた社会運動家のこと　——中名生幸力の生涯と事績——」『三田学会雑誌』80 巻 2 号、慶應義塾経済学会、pp. 54-66
小松隆二（1988）『大正自由人物語—望月桂とその周辺』岩波書店
渋谷定輔（1970）『農民哀史　野の魂と行動の記録』勁草書房
下中弥三郎（1925）『非政党同盟の主張および綱領』啓明パンフレット第二冊
庄司俊作（1991）『近代日本農村社会の展開　国家と農村』ミネルヴァ書房
隅谷三喜男（1995）『賀川豊彦』岩波書店
西田美昭（1991）「戦前日本における労働運動・農民運動の性質」東京大学社会科学研究所編『現代日本社会』第 4 巻、東京大学出版会、pp. 265-301
日本アナキズム運動人名事典編集委員会編（2004）『日本アナキズム運動人名事典』ぱる出版
林宥一・安田浩（1985）「社会運動の諸相」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史 9 近代 3』東京大学出版会、pp. 196-197
平島敏幸（2007）「雑誌『農民』と農民自治主義（二）」『流通經濟大學論集』42 巻 2 号、流通經濟大學、pp. 227-240
舩戸修一（2004）「農民文学とその社会構想　農民文学者・犬田卯の農本思想」『村落社会研究』10 巻 2 号、日本村落研究学会、pp. 31-42
松田道雄（1963）「解説」『アナーキズム』現代日本思想体系１６、筑摩書房、pp. 49-50。
森田和志（1997）「アナキストと県下の小作人運動」『埼玉県労働運動史研究』第 9 号、埼玉県労働運動史研究会、pp. 69-83
鑓田研一（1927）『トルストイの新研究　その無政府重農主義について』啓明パンフレット第 15 冊、啓明会
Germaine A. Hoston（1994）The State, identity, and the national question in China and Japan, Princeton: Princeton University Press

John Crump,（1993）Hatta Shū zō and Pure Anarchism in Interwar Japan, London: The MacMillan Press（碧川多衣子訳『八太舟三と日本のアナキズム』青木書店、1996 年）。
Sho Konishi（2013）Anarchist modernity : co-operatism and Japanese-Russian intellectual relations in modern Japan, Cam-bridge, Mass.: Harvard University Asia Center, distributed by Harvard University Press
Steven G. Marks（2003）How Russia shaped the modern world : from art to anti-semitism, ballet to bolshevism, Princeton: Princeton University Press
（1973）『大杉栄主幹　無政府主義新聞　労働運動　第一次〜第四次完全復刻版』黒色戦線社
（1981）『八太舟三全集　無政府共産主義』黒色戦線社
（1989）『小作人　復刻版』黒色戦線社
（1990）『復刻版　農民』全 5 巻、不二出版

［かげき　たつや／慶應義塾大学／社会思想史］